

夜九時、私は（こま寿司）の暖簾を下ろし、店の中に仕舞う。今日は日曜日だから、いつもより店仕舞いが一時間早い。

この店で働き始めてかれこれ三年になる弟子の優子が真剣な顔でモップをかけている。私は調理場の片付けに入る前に、いつもの客席で煙草をふかす。いつもその真剣な横顔を見てみると、サディズムにも似た感情が、私の中にもやりと浮かび上がる。

新小岩駅から歩いて三分のこの店は私が父から譲り受けたもので、先代からの客も一見の客も、毎日色んな顔ぶれがやって来る。お陰様で商売はそこそこ繁盛している。

しかしここ数日はずっと雨で、客足はそれほど多くはなかった。今日の朝刊によると、熱帯低気圧が太平洋上で台風へと変わり、明日の夜には関東に直撃する見込みらしい。冷房をつけてもこの蒸されたような空気が身体に纏わり付く。床を見つめる優子の鼻先からも、汗の玉がぶら下がっているが見える。そこそこのところで切り上げさせてやろうか。特に今日は客が少なかったため、寿司ネタが結構余ってしまったている。何しろこの季節だから足が早い。少しでもあれば家に持って帰り、酒の肴にでもするのだが、そういった量でもない。そうだ、久しぶりに腕前を見てやろうか。優子は物覚えが悪い。私が何度言っても悪い手の癖が治らない。私はそんな優子に辟易として、ここしばらく練習に付き合っただけでやらなかった。

「おい、寿司握るか」

優子はモップをかける手を止め、私の方を見たまま黙っている。

「なんだ、握りたくねえのか。毎日練習してんだろ。」

「あ、いえ。ありがとうございます。握らせてください」

「ああ、モップはもういいから準備しろ」

「あ、はい！」

優子はモップをしまおうと、調理場の中に入ってゆく。客席に腰掛けていた私も、追うようにして調理場に入る。

優子は手を洗うと、鮪のサクを取り出し、包丁を握った。丁寧な手つきで包丁のあごをサクの手前の角に当て、刃を入れる。半円を描くようにして、滑ら

かに包丁を手前に引く。綺麗な刺身が一枚、また一枚とまな板の上に重なるようにして増えていく。少しは上手くなったか。さあ、次は問題のシヤリだ。優子は右手を水で濡らし、飯台からひと握りのシヤリを取る。そして左手の上に載ったネタに、右手の人差し指でワサビをつける。シヤリをその上に載せ、親指で軽くそれを押す。天地をひっくり返し、白く細い手が、端正に刺身と米を寿司の形にしていく。随分と手つきが様になってきた。こう言った調子で、寿司下駄の上に次々と寿司が並んでゆく。私はただ、ずっとそれを黙って見つめる。優子の横顔は、藤谷美和子に似ている。

何貫かを見届けた後、私は客席に戻って待っていると、しばらくして優子がカコンカコンと下駄を鳴らしながら、寿司を持ってきた。目の前に置かれた寿司下駄には、端正に寿司が並んでいる。少し小ぶりの気もするが、いつもよりかは、悪くない。どうだ、手前を拝見してやろう。この瞬間になると毎度、少しばかり意地悪な気持ち湧いて来るのだ。

「師匠、お願いします」

私は優子の目を一瞥してから、黙ったまま醤油皿に醤油を垂らす。鮪を一貫手に取り、軽く醤油をつけて、一口で口の中に投げ入れるように放り込む。すぐわかる。ああ、いつもと変わらない。口の中で、シヤリが緩く解ける。

「形だけは、少しは良くなったな」

「ありがとうございます」

少し笑みを浮かべながら優子は小さく会釈する。私はアガリを口に含み、全てを飲み込んでから、優子の目を見る。

「ありがとうございますじゃねえんだよ。褒めてねえよ」

優子は少し俯いて申し訳なさそうな表情を見せる。いつもの顔だ。

「お前は何回握ってもシヤリが緩いんだよ。こんなのは寿司とは呼べないって言ってるんだろ」

「すみません」

「こんなのしゃもじで掬ったメシに刺身乗つけたのと何も変わらねえよ。ちゃんと握ってるのか」

「すみません」

「何だよ、すみませんって事はよ、ちゃんと握ってねえって事だよな。何でいつもいつもちゃんと握れねえんだ。お前の手、腐ってんじゃねえのか？おら、手見せてみる」

少し声を荒げた私の前に、優子は黙って両手を差し出した。私は彼女の右手を軽く掴む。

「はは、腐ってるな。もういいよ、こんな寿司、もう食いたくもねえや。俺の口まで腐っちまう。早く帰れ馬鹿」

いつもよりもきつく優子を罵倒した。優子は、初めて見るような怯えた顔をして、おぼつかない足取りで服を着替えに行った。私はため息をつく。なんだ、あいつのあの反応は。板前修業じゃあこれくらいの事は当たり前ではないか。まったくもってけしからん態度だ。

「お疲れ様でした」

私服に着替えた優子は、よろよろと店を後にする。

私は、店内で一人になり、もう一貫、寿司を口に運んだ。正直なところ、これまでほど悪くはない。あそこまで言う事はなかったか。

○

遂に、私は師匠をあそこまで怒らせてしまった。降りしきる雨の中、少し歩いた。しかし五分ほどしたところで、タクシーが近くを通り過ぎようとしたのを止め、体を投げ入れるようにして乗り込む。あと十分さえ歩けそうな気がしない。雨のせいもあるけれど、そんなのじゃない。なんだかもう、気力が無い。運転手に行き先を伝えた後は、ただポーツと水滴で埋め尽くされた窓の外を眺めていた。

私の手は、腐っているのだろうか。

アパートの前でタクシーを降り、そそくさと鉄板の階段を登る。雨で濡れたその階段に少し足を滑らせそうになり、間一髪でバランスを保つ。傘をたたみ、斜めに打ち付ける雨に背中を濡らしながら鍵を開けて、部屋に入る。

いつもなら真っ先に電気とテレビをつける私だが、今は暗いままがいい。ゆっくりと部屋の奥に向かう。濡れた靴下がびちゃびちゃと音を立てながら、床に足跡をつけていく。1DKの部屋の真ん中で暫く突っ立ったあと、服を脱ぐ。皮膚にまとわりつく布という布が、気持ち悪い。靴下も脱いだ。ブラジャーの締め付けも苦しい。ホックを外すと、さっきよりは少し息ができる。私が纏っているものは、パンティーのみとなった。それから、足が無気力にがくりと折れ曲がり、私はベッドに腰を下ろした。時計の秒針だけが規則的な音を立てて部屋中に響き渡っている。足の皮が柔らかくふやけ、蒸れた臭いがする。少し

腰を上げて体を伸ばし、扇風機のスイッチを入れた。湿った風が顔に当たる。無いよりはましだ。私は横になり、足を扇風機の方に突き出し、乾かした。

私の手は、腐っているのだろうか。

天井を眺める。思い返せば師匠はいつの日からか私に対して、事あるごとに人格否定を続けてきた。私は師匠に嫌われている。両親から虐待を受けていた私は、弟子入りが決まったとき、私が家を出る事をたいそう喜ばれたのを覚えている。師匠だけが、抛り所だと思って三年間生きていた。けどわかった。

私は誰からも必要とされていない存在なのだ。今日、心の中の何かがプツリと切れてしまった。頭の中で反芻する。

私の手は、腐っているのだろうか。

私の手は、腐っているのだろうか。

私の手は、腐っているのだろうか。

三年もあの店にいて、どれだけ練習しても、私は全く成長できていないんだから、私が駄目なんだ。

私の手は、腐っている。

私はお店に単食っているだけ。

私の手は、腐っているのに。

私は師匠の足手まとい。

私の手が、腐っているから。

いつだって師匠に認められなくて真剣なのに、どうしても上手く握れない。

私は腕を天井に向けて垂直に立てて、手のひらを見た。そこで私は、この世で最も醜いものを目にする。手のひらは、真っ黒に変色し、皮膚の表面がところどころ剥がれ、膿が出ていた。この手だ！

「ひゃっ」

驚きと恐怖が全身に走り、声にならない声が出る。

ベッドから傾れるように床に降りた私は、腰を抜かし、四つん這いになる。立ち上がれない。四肢が震えている。首の力を抜き、がくりと項垂れると、小さな乳房が地面に向かって重力に引っ張られているのが見える。私はきつと今、醜い獣のような姿をしている。そう思うと何だか、自分自身の内なる凶暴性の様なものが込み上げて来た気がする。

一步、また一步、獣の私は四つ足で前へ進む。標的は獲物なのか何なのか。

私の中では、抹殺すべき対象を追う為の感覚が研ぎ澄まされてゆくのがわかる。

ゆっくりと台所の方へ向かってゆく。帰宅時につけた足跡に手を滑らせ、私の上半身はバランスを崩し、顎を床にぶつける。

「ううううう、うううう！」

悲しみと憎しみと野生の衝動が入り混じった慟哭が、声帯を震わせる。やるせなさが更に私の本能の怒りを増幅させる。

台所にたどり着いた私は、収納扉を開ける。扉が開く際描く円弧の動きに私は身体の重心を奪われ、床に崩れる。まるで私の中で重心がぐるぐると移動しているような感覚になる。それでもただ、起き上がるだけだ。収納扉の内側には、いくつかの包丁が並んでいる。師匠から譲り受けたお古の出刃包丁を右手に取る。さつきよりも更に黒く、膿まみれになった左手で、刃を掴む。そして私は、その左手を高速で何度も上下する。血がすぐに指と指の隙間からあふれ出す。指の肉は擦れるようにして千切れてゆくの音が音と感覚でわかる。

「かーっ」

声にならない声が喉の奥からこみ上げてくる。やがて、刃と骨が擦れる感覚が現れる。

「んぎい」

あまりの痛さに、一瞬息が詰まった。堪え難い痛みが炎のように身体中に流れ込む、だが、まだだ。まだ右手がある。殺らないと。殺らないと！

しかし包丁は、左手指の骨に食い込み、握られたままの手中から抜けそうにない。そうわかった時私はすでに玄関に向かっていた。ドアノブを肘で開け、外に出る。周囲の音が一瞬にしてノイズの海へと変わる。容赦無く降りつける大雨にも構わず、私はただ本能のままに憎むべきものの抹殺に魂を傾けた。右手をドアに挟む。そして、できる限りの体重で、左肩でドアをタックルする。右手の弾力にドアが跳ねかえる。

「くううう」

そんな呻き声も、大雨の中に掻き消される。私は何度も何度もドアにタックルする。その度に、骨が砕ける。最初はゴリッ、ボキッといった太い音だったものが、次第にドアは跳ね返って来なくなり、音もシャリシャリというものに変わっていくのがわかる。地面には血に滲んだ小さな川が流れている。

「んぐうう」

そのまま暫く雨に濡れて項垂れていたが、暫くして半分ほど正気を取り戻して来た。このままでは風邪を引くと思い、何とかして部屋の中に入った。痛み

が度を通り越し、両手にはもう感覚が一切無い。これを痛いと感じようと思えば痛いのだろうな、などと思ってはみたが、どうもその方向には脳は作動しなかった。左手は、握られたままの出刃包丁と皮一枚でぶら下がる中指と薬指が、右手は、所々破れた皮が晴れ上がり、だらりと手首の先に付いている。

案外平気だった。朦朧とした意識の中でも、その奥の方で色々な事を考える事が出来る。救急車を呼ぼうか。出血多量で死んでしまうかもしれない。私は、固定電話の方へと歩いた。あ、そうだ。

私は固く尖らせた舌先で、電話のダイヤルを押してゆく。顎で外した受話器は、電話代からぶら下がっている。電話番号を押し終えると、受話器から無機質なコール音が流れ始める。私は、受話器の側の床に寝そべる。

「お前か、なんだ」

相変わらず渋い声だが、少し優しい話し方だ。私は、色々考える事は出来るけれど、声を出す元気は無い。

「もしもし、聞こえとるか」

「・・・は、はい」

特別に気力を振り絞って、声を出す。

「なんだ、どうした」

電話口の声は少し不機嫌そうになる。

「きて・・・ください・・・」

「なんの真似事だ・・・家か？家から電話しているのか？」

「はい」

「何があったんだ」

私はその質問に答える元気がなかった。というより、敢えて答えていないようでもある。

○

私は、優子からの電話にただ事では無い何かを感じ、急いで家を出た。トヨタ・初代型カーリーナ ED に鍵を差し、エンジンをつける。優子の住むアパートまでは五分だ。しかしその五分ですら、優子の命運を左右する五分かもしれない。そう思うと、無意識にハンドルを固く握り締めてしまう。

アパート前に着くと、私は車の鍵も閉めないまま、部屋に向かう。ドアを叩く。

「優子！優子！」

返事はない。落ち着こうと私は一息つく。そしてドアノブを捻ってみると、扉が開いた。鍵はかかかっていない。まさか、強盗だろうか。

部屋の中は、薄暗い。部屋の奥で息を切らす声がする。

「優子、優子！？」

床には至る所に血痕が見られる。恐る恐る歩みを進めると、電話の前で優子が倒れているのが見えた。

「優子！」

私は彼女の元に駆け寄り、身体を抱きかかえる。

「ほら、どうした。何があったんだ、優子」

「師匠・・・」

優子は弱弱しく返事をする。私はその時、優子の手を見た。

「どうしたんだ！この手！」

私は声を荒げる。

「私の手は、腐ってるから・・・」

優子の目尻からは、一筋の涙が溢れた。一瞬、雷に打たれたように動けなくなり、胸の奥から吐き気がこみ上げてくる。

私は毛布で身を包んだ優子を担いで濡れた鉄の階段を慎重に降りてゆき、後部座席に彼女を横たえる。近くの救急病院まで、全速力でアクセルを踏み込む。

なんでこんな事になってしまったのか。焦りから、そんな自問を何度もした。

しかしそれは全く意味をなさない。なぜなら、間違いなく私が罵倒しすぎたせいだからだ。頭の中はもう一杯だ。

突然、車道は青信号にも関わらず、横断歩道を自転車が飛び出してきた。私は急ブレーキをかける。その慣性で、優子は座席から転がり落ち、左手が体の下敷きになる。

「あああっ」

苦しそうな叫び声が聞こえる。

「くそっ！」

私はクラクションを思いっきり、三秒鳴らした。

○

目が覚めると、医者は、私にレントゲン写真を見せてきた。

「おはようございます。昨晚は大変でしたね。どうしてそんな事をなさったのですか？」

医者の口調は淡々としたものだった。それに対して私は、特に何かを話す気分にはならない。何も話さず動かさずの今の状態が下腹部に乗っかっているような感じとでも言えば良いだろうか。少し眼球だけを動かすと、ベッドの隣では、丸椅子に座る師匠の姿が見えた。口を開かない私を見かねて、医者は続ける。

「左手の方はですね、神経を繋げる手術をしましてですね、一応は繋がりました。ただ、前のように動かないと思います。」

「はい」

「それですね、右手の方なんです。このレントゲンを見てください。これは、もう骨が粉々です。砂が入った手袋のようでしたよ。本当は切断するのは手首から先だけにしたかったんですけど、神経の損傷が激しくてですね、それでは腕に痺れの後遺症が残る可能性がですね、考慮されますので、肘から先を、切断する事にいたしました。」

切断。私は自分の右腕の方を見やると、確かに肘から先がなく、包帯が巻かれている。私は、自分がした事がどういう事だったかを、ようやく認識した。師匠は隣で、終始俯いていた。

○

家に帰ったのは朝だった。それから一眠りして、昼過ぎに目を覚ました。カーナで店へ行き、店内の机で「誠に勝手に失礼いたしますが、本日は臨時休業いたします」という張り紙を書いた。それを店の入り口に貼り、私は今、前に止めたカーナに乗り込んだ。

ハンドルに脚を掛け、煙草を一服ふかす。途方も無い深さの夜を過ごしたせいもあって、いつになく昼の空が目に見える。暗い巣穴から出てきた何かの動物のようだ。この時間から酒を飲んでいる男、買い物袋を手に提げた主婦、様々な人間が車の周りを通り過ぎてゆく。まるで車内にいる私の時間だけが止まってしまう、世界から取り残されているような気さえしてしまう。

昨日の私はなぜ、優子にあれほどきつい言い方をしてしまったのだろう。寿司の出来は優子にしては悪くなかった。あの罵詈雑言は、まるで私であって私でない何かが発したもののようにも感じる。昨日の事だけでは無い。私の優子に対しての眼差しそのものが、いつの日からか、そうだったような気さえして



くる。この感覚は一体何なのか、気持ちの整理が追いつかない。しかし、私の感情がどうであれ、私が発した言葉によって、優子は寿司職人の、それだけではない、健全者としての、未来を奪われた。それが事実だ。「私でない何か」などというものは言い訳にしかない。頭の中は罪悪感で一杯になり、とても正常とは言えない状態になっている。このまま運転したら、事故を起こしてしまいそうで、少し水でも飲もうと私は店の中に戻ることにした。

店内はいつもの開店前の様子と同じはずなのに、これまで感じたことがないくらいにがらんとしていた。私の心に空いた空白がそのまま見えているようだった。

私は宙を歩いているような、現実味のない足取りで調理場に向かい、湯呑みを手にとった。水道から水を出そうと蛇口に手をかける。いや、アガリでも飲もうか。そう思い、私はやかに水を入れ、コンロに火を点ける。

ふと、冷蔵ショーケースに入った、優子の寿司が目に入る。もう一度、寿司の味を確かめよう。私は恐る恐る、ケースから寿司を取り出す。そして、ゆっくりと口の中に運ぶ。

〈烏賊〉

悪くない。やはり少し上手くなっている。目を瞑り、ゆっくりと味わい、飲み込む。そして、次の寿司に手を伸ばす。

〈鰯〉

また、ゆっくりと咀嚼する。目から、涙が溢れてくる。私が、優子の未来を奪ってしまった。

「優子。優子。優子お。」

感情が、決壊したダムのように溢れ出し、炸裂した。私は、膝からそのまま崩れ落ちる。悔しい。苦しい。自分は、取り返しのつかない事をしてしまったのだ。

優子と初めて会ったのは、私の姉が連れてきた時だった。〆近所の娘さんで、高校生の時から寿司職人になる事を夢見ていたそうだ。あの時のお前の目が、とても輝いていたのを今でも鮮明に覚えている。しかし私は弟子入りを断った。何度も断った。女に寿司は握れないからだ。それでも諦める事なく何度も店の門を叩いたお前は、本気だった。一人前の職人になるのを夢見て、ひたむきに努力していた。そんなお前の夢を、奪ったのだ！

「優子お！優子お！」

私は声を枯らしながら叫ぶ。どうして私はずっと優子にサディスティックだったのだろうか。それは、本当に師匠としての愛だったのか。生真面目な優子。寿司を愛する優子。真っ直ぐな目の優子。笑顔の可愛い優子。優子のいいところしか、思い浮かばないのに。

「ふああ！」

私はシャツを引き裂くように、ズボンを足で蹴るように脱ぐ。そして震える手で、優子が握った最後の寿司〈鰻〉を掴む。

「優子、優子お」

怯んだ子犬のような声が喉の奥から漏れ出る。〈鰻〉を掴んだ私の震える手は、ゆっくりと下半身へ向かい、一息に、パンツの中に突っ込む。

「ゆうごおお」

私は〈鰻〉が入った白ブリーフの股間部分を、激しく揉みしだく。優子が握った寿司と私のペニスが溶け合う。冷えたシャリがペニスを優しく包み込む。鰻の切り身が舐めるように絡みつく。そしてやってくるワサビの刺激。この痛みは、罪を犯した痛み。私は近くにある醤油差しを手に取り、パンツの中に流し込む。ブリーフの純白が、じわじわと茶色に染まってゆく。そして、感じてはいけない快樂が全身を駆け巡る。やがてやかんが汽笛のような音を出しながら、蒸気を吹き出す。

外に出ると、雨が降り始めていた。台風が近づいてきている。カーリーナのドアを開け、運転席に体を沈める。私は、何も考えられない抜け殻のような状態となっていた。自分自身のある感情に気がついてしまったからだ。

優子を、愛しているのだ。弟子としてではなく、一人の女性として、愛してしまっていたのだ。私は薄々それに気がついていた。しかしそれを認められないでいたのだ。相手は娘ほど歳の離れた女だ。しかも、私たちは師弟関係の中にある。自分の感情に背徳感を感じ、それを認めたくないがあまり、“師匠として”の大義名分を振りかざして、必要以上にサディスティックに当たっていた。あまりに身勝手過ぎる。そんな認めたくない自分の姿を知ってしまった。これ以上はもう何も考えられない。

とにかく私は無心で車を走らせた。どこへ向かうかわからない。こんな風に、どこへ向かうかわからない時、私は決まってある場所に向かっている。

病院の天井を眺めていると、思考が堂々巡りする。何故、あんな事をしてしまったのだろうかとばかり考える。何故かそこから先に考えが発展する事は無い。昨日の夜の出来事は、途轍もなく悪い夢を見ていたような感覚。記憶が曖昧で、もはや今、腕が切断されている事すらも悪い夢の続きのような気がして、現実味がない。しかし、この引き裂かれるような右腕と左手の痛みが、これは現実に起きた事だと私にわからせている。これから両手が使えないこの状態で、どうやって生きていく事になるのか、想像がつかない。

五十代くらいの柴田という看護婦が夕食をカートに乗せてやってきた。

「西山さん、ご飯ですよ。」

ベッドを起こしてもらい、机を立ててもらおう。そしてその上に夕食の乗ったお盆が置かれる。ご飯、乾いた豚しゃぶ、冷奴、サラダ、フルーツ。いかにも病院食といった感じだ。柴田が、ベッドの横に座り、食べ物を口に運んでくれる。

「サラダから先に食べるとね、いいんですよ」

「そうなんですか」

と、言い終わった直後に口にサラダを突っ込まれる。タイミングが悪い。昼食の時も何回か同じことがあった。こういった小さなイライラも、これからずっと続くのだと思うと、途方も無い気持ちになる。食事中は話しかけられても喋らない事にしよう。

「じゃあ次、ご飯ですよ」

ご飯は口の前にやってくる。私は冷奴が食べたいのに。でも喋らないと決めたから、言われるがままの順番で食べる。

「よく噛むとね、脳が活性化して、元氣になれますからね。はい、飲み込みましたね。じゃあ豚しゃぶ。お肉をね、いっぱい食べて、たんぱく質を沢山とつたら傷の治りも早いですからね」

よく喋る看護婦だ。どれだけ柴田が話しかけてきても、私は相槌ひとつ打たない所存だ。

「あら、西山さん、元氣ない？」

「あ、まあ、体調は別に。元氣ですよ」

食べにくいから話したくないだけなのに。いちいち鬱陶しい。

長い食事が終わると、痛み止めを飲まされる。

「痛み止めは痛くなったらすぐ言ってくださいね。ナースコール押せないと思

うから、夜中でも二時間に一回は様子見にくるから」

「はい」

「あと、明日は十時から精神科の先生に診てもらおう事になったから、またその時呼びに来ますので」

「精神科ですか」

「ええ」

○

〈スナックちとせ〉小さな看板が、風でカタカタと揺れている。ステンドグラスが嵌められた扉を開けると、懐かしい空間がそこに広がっていた。一年ぶりだろうか。というより、一年に一回くらい、私はここに足を踏み入れる。中にはタバコを吸う女が一人。客はいない。

「あら、アンタ」

女がこちらの方を向き、ほんの少しだけ微笑む。

「スミちゃん、久しぶり」

澄子。十年前に離婚した元妻の名前だ。別れてから二年後、再婚した男の金で川崎にこのスナックを開いた。私と澄子は殺し合いの離婚劇を繰り広げた仲だが、今では苦しくなった時、何故かこうして元妻が一人で切り盛りするこの店にたまに来ている。

「今日はもう店閉めようと思ったのよ。一応開けてみたけど、誰も来ないし」

「迷惑だったか」

「ちよつとね」

澄子は立ち上がり、私の横を通り過ぎる。扉を少し開け、外にかかった掛け札を“CLOSE”に裏返す。

「まあいいわよ。亭主も今日は帰ってこないし」

「そうか」

私は赤いソファに腰をおろした。

「今日はどうしたの」

澄子はキッチンでグラスに氷を入れながら訊ねる。私はタバコに火をつける。

「まあな、色々あるわけよ」

「勝手ね」

おしぼりとバーボンの水割りを持って澄子は私の隣に座る。

「もう、都合のいい時だけ会いに来るんだから」

「しよっちゅう来られても困るだろう」

「それはそうね」

澄子もタバコに火をつける。

「タバコ、変えた？」

「前からこれよ」

「そうだったか」

澄子は口を大きめに開けて煙を吐き出す。私は、短くなったタバコを灰皿に押し付ける。目の前が二人の煙で白く曇っている。

「アンタ、今日顔色悪いよ」

「そうか？」

「うん、あたしが離婚届突きつけた時みたいな顔色してる」

「相当だな」

なんだか、いつもに増してよそよそしい空気になっている気がする。そう感じているのは、私の方だけかもしれない。

「スミちゃんの、吸っていいか」

「いいよ」

澄子は、自分の吸っているタバコを灰皿に置くと、箱から一本取り出し、それを啜え、火をつける。そしてそのタバコを、私の口に啜えさせる。

「相変わらずだな」

「嫌？」

「別に」

「そう。したくて来たんでしょ」

「そんなんじゃない」

私は澄子と目を合わせないまま、そう答えた。澄子は、いつになってもいい女だ。そして、歳を取る毎に更にいい女になってゆく。

澄子に逃げられたのも、私が身勝手だったせいだ。当時は何が悪かったのか解らなかったが、次第に解ってきた事だ。そして、その反省は生かされないまま、私は優子をも失おうとしている。

目を細めて煙を吐く澄子の横顔を見つめる。本当にいい女だ。

「なーに、見とれちゃって」

無邪気に笑う澄子。

「別に見とれてはいねえよ」

「ほんとう？ほら、勃ってるよ」

いつの間にか、澄子の右手は私の股間を掴んでいた。いつの間にか勃ってしまっていた私の股間を。

「いいんだよ、別に」

「そうか」

私は股の力を緩め、太ももを少し開いた。

「ワケなどいらないう傷跡かくす人々抱いて貪りつきよなよ私のカラダ」

澄子は妖艶な笑顔を浮かべながら軽やかに「蘇る金狼」のテーマを口ずさんで、私のズボンのチャックを開けてゆく。ちよつと待て、今はマズイ。

「あつ、ちよ、ちよつと。やっぱ今日はやめ」

「シート」

澄子は私の唇の前に人差し指を立て、言葉を遮る。

「いいのよ、私も溜まってるの。最近亭主が冷たくて」

澄子は私のズボンとパンツをまとめて掴み、一気に下ろす。

「ああつ！」

女々しい声を出す私の股間を見つめる澄子。

「こんなところにご飯粒ついてる」

澄子は陰毛にくっついたご飯粒を摘み、指で弾く。悪い予感的中した。こんな事になるとは思っていなかったから、完璧には洗わずにこま寿司を後にしていたのであった。澄子はさして気にしない様子で、私のいきり立つペニスを口に咥える。しかし数回頭を上下に動かすと、澄子は顔をあげる。

「なんか醤油の味がするんだけど」

私は何も答えられなかった。

「変わった事してるのね。アンタも溜まってるのね」

そう言っただけ澄子は、また何事もなかったかのように、続けたのだった。

○

師匠が迎えにきた。今日は退院の日だ。病室にある私物を片付けてくれている。私もリハビリのおかげで幾ばくかは左手が使えるようになってきたが、そう自由には動かない。自分で下着だけ袋に詰めたら、あとは全て師匠がやってくれている。

「櫛はこのポーチか」

「はい」

店の掃除や片付けといった事で私を手足として使っていた師匠が、今は私の手足となっている。何だか少し優越感に似たものを感じる。

今回の事は、全て私が悪い。いくら師匠にきつく言われたからといって、何もこうする事はなかったと思う。だからきつと、師匠を責めるのも間違っているとと思う。しかし今回の事をきっかけに、師匠の私に対する態度は明らかに変化しているのがわかる。ただの怪我人に対してのそれとは違う感情を内包している。自責の念と、あともう一つ、何か別の感情が存在しているように見える。

師匠を責めるつもりは毛頭無い。それでも、師匠が自責の念に執られているさまを見ると私はどうしてか、嬉しくなってしまう。私のした事には、復讐の意味も秘めていたのかもしれない。師匠は私の未来を奪ったという十字架を背負い続ける。明らかに私の顔色を伺い、馴れないさまで、慎重に優しく接してくる師匠が、面白くって仕方がない。親に捨てられたような私を、あなたは捨てずにいてくれる。それは私にとって初めての悦びでもある。

「よし、荷造りは終わった。出ようか」

看護婦や医者に肩を貸してもらいながら、病室を出る。

「優子ちゃん、まだまだこれから大変だろうけど、頑張ってね」

柴田がニコリと微笑む。彼女は最後まで、ひと言ひと言が何だか嘘っぽくて、私の気持ちに鈍感な看護婦だった。それでもこれが人当たりのいい看護婦、というものなのだろう。

「お世話になりました」

小さく会釈して、病院を後にする。

私が車の助手席に乗り込むと、師匠は扉を閉める。そして運転席につく。そして一息ついて、優しく語りかけてくる。

「どこか行きたいところはあるか」

「行きたいところ。別に無いです」

「そうか」

車は穏やかに動き出す。私は当面の間、師匠の家に住ませて事になっている。私の方からそう提案した。他に帰るところなんてない。師匠は最初、戸惑った様子だった。きつと、私が師匠の元から去るかもしれないと思っていたのだろう。「優子がそれでいいなら」という返事だった。

「どこかでご飯でも食べていくか？」

師匠が訊ねる。久しぶりに〈珍龍飯店〉の炒飯と餃子が食べたいと思った。しかし、この姿でいきなり店に入ったら、店主の康さんも驚くだろう。退院したばかりの今はまだ、そういった心の準備ができていない。

「お昼はいいです」

「そうか。じゃあ途中でスーパー寄って何か買ってくるわ。欲しいものはあるか」

「師匠の分だけでいいです。お腹あんまり空いてないんで」

師匠の家の前に着いた。店から徒歩で五分のところにある一軒家に師匠は一人で住んでいる。師匠にまだ奥さんがいた頃に購入した家らしい。以前に一度だけここに上がった事がある。今日からはしばらく、ここが私の家。

「じゃあ、上がって」

師匠が玄関のドアを開け、私を家に入れる。まるで私の執事のような、と思ったりする。

玄関の靴は綺麗に並んでいる。廊下を通り過ぎると、リビングが現れる。随分と片付いている。以前に来た時は、いかにも一人暮らしの中年の家といった感じで結構散らかっていた覚えがある。

「お前が来るっていうんで、頑張って片付けたよ。ハハ」

私はダイニングテーブルの椅子に座る。

「アイスコーヒーでいいか」

「あ、ありがとうございます」

師匠の家に上げてもらって、こうやって椅子に座ってコーヒーが出されるのを待っていると、自然とかしこまった気持ちで脚を閉め、膝に手を乗せようとしてしまう。しかし、今は左手だけだ。上体のバランスが少し変な感じだ。このように日常の小さな節々で腕を失った事に気がつく時が一番虚しい。

目の前にアイスコーヒーの入ったグラスが差し出される。

「ストロー」

私は少し不機嫌そうにそう言ってみた。面倒を見るなら、師匠はもっと私の身になって考えるようにして欲しい。

「ああ、ごめんなさい。ストロー、ストローつと」

師匠キッチンの引き出しを開けてストローを探す。なかなか見つからないよう



だ。

「あ、ストロー、あった」

師匠は作り笑いのような表情を浮かべて、ストローを手に持って見せた。

「ごめんな。まだ慣れなくて。へへ」

私のアイスコーヒーにストローを差す師匠。私はアイスコーヒーを啜る。

「お前の荷物は全部こっちに持って来たから。あっちが優子の部屋だ」

師匠が指差した先を見やると、リビングから繋がった六畳ほどの和室があった。部屋の隅に私の荷物がまとめられ、真ん中に布団が敷かれている。

「二階に洋室があるんだが、階段は危ないだろう」

「そうですね。ありがとうございます」

「あの部屋からだと、頭をあっちに向けて襖を開けっぱなしにしておくとか、テレビも見えるだろう」

師匠はとても私に気を遣っている事がわかった。

「あと十五分したら店に行くから。ゆっくりしとってくれ」

「わかりました」

○

あの日の翌日以外、優子が入院している間も、私は毎日こうして店に立っている。いつもと変わらぬよう意識しながら、寿司を握り続けている。しかし頭の中では、あの日を境に腕が落ちてしまったような気がしてしまう。だが客はこれまでと変わらぬ顔で食べているから、きっと杞憂に過ぎないのだろう。そう思いたい。

「大将、最近あの、優子ちゃん見かけないね。辞めちゃったのかい？」

常連客の吉田が冷酒を飲みながら訊ねる。なんと答えようか。少し考えてから私は答える。

「ちよつと怪我したみたいでね、アイツ」

嘘はつけなかったが、ぼやかした物言いで答える。実際、私が一番、優子がこの店にいない現実を受け止められないでいるからだ。

「そうなんだ。難儀だねえ。可愛かったのに」

「ハハ・・・。へい、エンガワと数の子」

握り終えた寿司を寿司下駄に乗せて客の前に出す。

「コンバンワ」

店に入って来たのは、ガーナ人のオニャンボだ。近所で多国籍料理の店を営んでいる。

「イヤ、スズシイネ。ソトアッチイヨ」

「優子、おしぼり」

と、言いかけて、私は口をつぐむ。優子はもういない。しかし、未だにいつもの癖で声をかけそうになってしまう。私は冷蔵庫から取り出したおしぼりをオニャンボに渡す。

「アリガトネ。イクラ5カン」

「ニャンさんはイクラが好きだねえ。イクラばっかし食べてると、痛風になっちまうよ」

「ツウフウ？」

「イクラとかね、プリン体が多い食べ物ばっか食べてるとね、体の関節が痛くなる病気になるんだよ。酷いと歩けなくなっちまうよ」

「エー、コワイイ。ア、タイショウ。アト、ビールイッパイ！」

「もう、ニャンさん。ビールもプリン体が入ってるんだよ。ビール頼むなら、イクラ一貫減らしとくよ」

「マジカーヨ。ソナノナニモタベラレナイジヤナイカー」

オニャンボがオーバーな身振りで頭を抱えてみせる。吉田と私は笑う。笑いがおさまると、吉田が少し体を前のめりにして、話しかけて来た。

「大将最近、話し方がちよっと優しくなってきたなあ」

「そう？」

「ウンウン、そうだよ。なんというか、大将はもっとシャイな感じで、声ももっと低い感じだったと思うよ。なんだか最近は何となく優しい感じになったというかね。オニャンボがイクラ10貫頼んでも、黙々と握って、へいって言って出してたじゃないか。」

そうだったかもしれない。自分ではそんな変化には気づいていなかった。

「黙々としてる方がいいかい？」

「いやいや、そういう事じゃないよ。前の大将もいかにも職人、って感じで俺は好きだけどさ、今の大将は大将で、いいと思うよ。ま、そっちの方がお客も増えるんじゃないかな。」

「そうかい。もう十分繁盛しとるけどな」

店内は笑いに包まれる。

確かに、吉田の言う事には一理ある。言われてみればこれまでと比べて、物言いが柔らかくなったような気がする。変わったとしたら、やはりあの一件以来という事だろうか。優子の介護をしているうちに、私の中で変化があったという事だ。それに。

「ニャンさん、イクラ4貫と、ビール」

「オキヅカイ、アリガトゴジヤイマス」

それに、優子がいた頃の私は、師匠らしくと格好をつけていたのかもしれない。

優子のお陰で私は、これからありのままの自分で生きていけるきっかけを得られたと言えるかもしれない。ふと、そんな風な事を考えた。

○

師匠の家に住まわせてもらうようになって、一週間が経った。相変わらず不自由な暮らしには変わりないが、私の中でもそろそろこの手で生きていく事への覚悟ができて始めている。障害者手帳も手にした。自分の犯した過ちと、それによる変えようのない現実を受け止めない限りは、前に進むことはできない。

師匠は、完全に私に優しく接してくれる人となった。台所でカレーをよそうその背中では、これまで見てきたものとは全く違う、丸く穏やかな様相だ。私は毎日、リビングの椅子に腰掛けながら、それを眺めている。

「はいお待ち。夏野菜たっぷり入れたからな」

師匠はカレーと店から持って帰って来た刺身を私の前に置いて、隣の椅子に座る。これがこの暮らしでの定位置だ。リハビリの甲斐あって左手で大まかな動作はできるようになった。スプーンやフォークでなら、自力で食事をする事ができる。私はゆっくりと、カレーを食べる。

「口についてるよ」

こうして師匠は、横からティッシュで私の口を拭いてくれる。こんなのは舌で舐めとればいい事なのに、わざわざ隣に座ってやってくれるのだ。自分で食べられるようになったのはまだほんの数日前の事で、師匠の中ではまだ隣に座って私の世話をする習慣が残っているのだろう。

「おいしい」

「そうか。毎日、この時間ですまん」

時計は二十三時をさしている。私がここに住むようになってから毎日、日曜日のように一時間早く店を閉めて帰ってきている。

「私は全然大丈夫だよ。それより店の売り上げは大丈夫？」

実は私は、閉店時間が早まった事が売り上げに影響しているのではないかと、少し罪悪感を感じている。

「全然大丈夫さ。むしろね、最近何人かの常連がな、新しいツレを連れて来てくれたりしてるんだ」

「本当？良かったね」

嬉しい反面で、私は少し浮かない顔になる。

「どうしたんだ」

師匠は私の細かい変化にすぐ気がつく。

「私がいなくなつて、お客さんが増え・・・」

「そんなじゃない。私が、変わったんだ。優子をこうして面倒見ているうちに、思いやりとか、そういう気持ち芽生えたんだよ。今更だよな、ほんと。客も今の方が、居心地がいいんだろうな、きっと」

「・・・そう」

「今の時代、カタブツの職人氣質つても、時代遅れなのかもな。それを気づかせてくれたのは優子、お前だよ。ありがとう。」

師匠は明るく微笑む。そしてこう続ける。

「でも、優子の寿司がもう食べられないのは、本当に悲しい」

全く勝手な発言だ。私はあなたの言葉に傷つき、この両手を犠牲にした。あなただって、私をカタワにしたのは自分の責任だと思っているのでしょうか。なのに私のお陰で優しくなれたなんて。だけどそれでも、あなたは初めて私に優しく接してくれた人だ。深い海の底でもがき続けた私の人生が、初めて人の優しさに触れている。この幸せを失いたくない。そして私は、師匠を優しい人間に変えた女だ。あなたを失いたくない。

師匠に対する私の気持ちは、憎悪と愛情が混在し始める。

あなたは私のものだ！ずっとずっと、私のものだ！

私は嗚咽する。身体が熱くなり、わけのわからない涙が胸の奥から込み上げる。

「どうした！どうしたんだ。優子」

心配し、私の顔を覗き込んだ師匠の唇に、ずっと自分の唇を重ねる。涙が頬を伝う。私は左腕で師匠を抱き寄せる。

「師匠。あなたは、私のことが好き？」

重なり合った唇と唇の隙間から漏れる息に乗せて、私は囁き、舌を挿れる。師匠は私の舌を貪りながら囁き返す。

「ずっとずっと、お前の事が好きだったんだ」

あなたは私の腰に手を回し、抱きしめる。私たちの息は混じり合い、世界は二人だけのものとなった。目を瞑ってキスをしていると、二人の口の中だけがこの世界に存在する宇宙であるかのような気分になる。

あなたはずっと私のことが好きだったのね。じゃあ何故？じゃあ何故、私を苛めたの？あなたはこんなに、優しくできる人なのに。好きだから、苛めたの？

○

私はついに、隠してきた本心を打ち明けてしまった。そして優子と私は今、こんな事をしてしまっている。お前は何故、私にキスをしてきたのだ？私を憎んではないのか。こんなに美しいお前を傷つけた私に対しての仕打ちがこれぐらいのだろうか。お前はそれをどう受け止めているのだ。

もしやこれは、私に対する罠だろうか。私は、お前に殺されるのかもしれない。もしそうなのだとしても、私はそれを甘んじて受け止めよう。私の罪がお前自身の手によって裁かれるのであれば、それもまた本望だ。

優子は唇を離した。

「私が握ったお寿司、食べたい？」

息を切らし、妖艶な目つきでこちらを見る。そうか、これは私に対する復讐か。

「ごめん。さっきは無神経な事を言ってしまった」

「ううん。そうじゃないの。少し目を瞑っていて」

私は言われるがままに目を瞑る。私を殺しても構わない。全てお前の言う通りにしよう。

優子の体が、私の体から離れる。ナイフを取りに行くのだろうか。しかし、椅子から立つ音は聞こえない。そうして暫く待っていると、咀嚼音は聞こえ始める。まさか、こんな時に、ご飯を食べはじめるのか。しかし私はお前がいいと言うまで目を開けないよ。だった私はお前の従順な犬なのだから。

すると突然、優子が再び私にキスをした。私は口を開ける。すると私の口内に、どろっとしたものが流れ込む。これは、米と刺身だ。

「師匠、私のお口で握ったお寿司、美味しい？」

耳元で囁かれる声。心拍数が急激に上がったかと思うと、私の全身の血液は物

凄い勢いで駆け巡る。私はゆっくりと、口移しされた寿司を飲み込む。なんと甘美な罰なのだろうか。

臉を開くと、優子は私をずっと見つめている。とても美しいその女神は、とても美しいやり方で、私の罪を罰するのではなく、赦したのだ。

「師匠、私の全てを、受け入れてくれますか？この手も、この心も、私の全部を、受け入れてくれますか？」

私は、優しく優子を抱きしめた。

それから数日が経った。まるで何事もなかったかのように私たちはいつもの生活へと戻っていた。

そんなある日、優子はこんな事を私に言ってきた。

「私、久しぶりに師匠のお寿司を食べたい。時間がある時でいいから、沢山作って。沢山。魂を込めて作ってね。お願い。」

○

師匠が、沢山の寿司を持って帰って来た。すし桶いっぱい敷き詰められた寿司たちは、一つ一つが師匠が生み出す芸術だ。

「こんなものでいいか」

「うん、ありがとう。ねえ、お願いがあるんだけど」

「なんだ」

「この寿司、私に食べさせて」

「おう、わかった」

師匠は、一貫ずつ、私の口に寿司を運んでゆく。私は、それをじっくりと味わう。そんな師匠の股間にふと目を見やると、勃起しているように見える。師匠はまた、私の握った寿司が欲しいのだろうか。

「可愛い」

私は師匠の目を見て、微笑んで見せる。

「なんだ、いきなり」

取り繕った様子で師匠は言葉を返す。私は知っている。あなたはもう、私のものになっている。

「カンパチ、お願い」

師匠は言われた通り、私の口にカンパチを運ぶ。師匠の寿司は、本当に美味し

い。私の手では到底こんなものを握ることは出来ない。

私は最後の寿司を食べ終えた。

「腹はいっぱいか？」

「うん、お昼も何も食べてないから、沢山食べちゃった。ご馳走様」

「それは良かった」

○

優子が、私の腕の中にいる。この全身の魂を美しい私の女神に注ぎ込むように、身体を動かす。一度罪を犯した私を赦してくださいその神聖な存在。この世に存在する何よりも愛おしく大切なものだ。

まさか優子とセックスをする日が来るなど、夢にも思わなかった事だ。行き過ぎたサディズムをぶつけ、未来を奪った私に、女神が微笑む。こんな私に、夢が叶っていいものだろうか。

お前と出会ってから今日まで、どれだけの月日が経った事だろう。私は優子によって、重い鎧を脱ぎ捨てる事ができた。そのお陰で店も繁盛する事ができた。お前によって私の心は変わる事ができた。罪を赦された今、私はお前に対して、これまでの人生で感じたことのないほどの感謝の気持ちを感じている。この夢から覚めた時、例えどれほどの苦しみが待っていたとしても、全てを受け入れよう。これが復讐の一環かもしれないという疑念はまだ消えない。しかし優子が、この私に復讐をしてくれるのならば、それさえも幸せだと心から思う事ができるのだ。

「うっ・・・！」

私の全ては、お前に奪われた。私の全てを、お前の中に残す。

今が昼なのか夜なのか、どちらが右で左なのか、これが現実なのか夢なのか、もはやそんな事はわからないくらいに、私は全てを出し切った。ただ仰向けになり、お前の息を感じている。

優子は、私の顔の上に跨り、しゃがんだ。さあ、次は何をくれるんだい。

「師匠、私はあなたの事、愛しているのよ」

そう言っつて、優子は力んだ。全身の筋肉が引き締まっているお前の姿に、私は母の体の中から生まれてきた時の事を思い出す。私は、優子という新たな母によって再び生まれたのだと気がついた。

この世の眩しさに霞んだ視界の中で、私は捉える。優子の肛門が、膨らむの

を。空に、穴が開く。穴は徐々に大きさを広げてゆき、救世主が姿を現す。優子の匂いと温かさを秘めた救世主は、私の元へとやって来る。私は息を深く吸い込み、全身で女神の存在を感じる。身体の筋肉は全ての緊張から解放され、私は光に包まれる。魂が空気の波動と同化し、私は風となり、秋を告げる虫の音となる。

私は大きく口を開け、天から降りて来る救世主を受け止めた。

「美味しい？」

それは、魂を込めて握った私の寿司が優子の中に取り込まれ、そして彼女自身がその全身をもってして、握った寿司であった。最高に美しく、極上の寿司だ。咀嚼し、飲み込むと、穢れた私の身体が浄化されてゆく。

優子が微笑む。その声は、生命の誕生した時の声であると、直感でわかった。

「まだだよ。もう一回、口を開けて」

私は口を開ける。まるで親鳥に餌をもらう小鳥のように、純真無垢に。

すると空から、黄金色の雨が降り注いだ。私はただそれを受け止める。この身心に纏わり付いていた垢が全て洗い流され、ついに最初の人類のように、丸裸になる。その時初めて、自分が生きた意味を理解した。

「はい、アガリ」

銀色に輝く何かが、視界をかすめた。